

李白詩の絶句における固有名詞の用い方

渡部英喜

はじめに

李白には「峨眉山月歌」と題する七言絶句がある。この詩の見どころは詩中に多くの固有名詞を詠みこなしているところにある。明の王世貞は「此れ太白の佳境なり。二十八字中、峨眉山、平羌江、清溪、三峽、渝州有り。後人をして之を爲さしめば、痕迹に勝えず。益ます此の老が鑢錐の妙を見る」と賞賛しているのは固有名詞を多用しているながら、その固有名詞の字面を巧みに利用しているからである。

李白の「峨眉山月歌」詩を讀んでから、李白の詩における固有名詞の用い方に些か興味を抱いていた。李白はどのような固有名詞を詠い込んでいるのだろうか。また、固有名詞を詠い込んだ詩をどれくらい残しているのだろうか、ということが氣になつていたのである。今回は李白の絶句だけに的を絞つて、固有名詞との關わりについて少しく考察を試みてみたい。

固有名詞の種類について

先ず各巻ごとに、絶句の總數を數え、さらに詩中に固有名詞が詠われている絶句を取り出し、總詩數に對する絶句の割合、絶句の總數に對し

表1

| 卷 | ジャンル | 總詩數 | 絶句總數 | 總詩數に對する絶句の割合 | 固有名詞を含む絶句數 | 絶句總數に對する固有名詞を含む絶句數の割合 |
|------|------|-----|------|--------------|------------|-----------------------|
| 卷一 | 古風 | 五九首 | 〇首 | 〇% | 〇首 | 〇% |
| 卷二 | 樂府 | 四〇首 | 〇首 | 〇% | 〇首 | 〇% |
| 卷三 | 樂府 | 三六首 | 〇首 | 〇% | 〇首 | 〇% |
| 卷四 | 樂府 | 四四首 | 〇首 | 〇% | 〇首 | 〇% |
| 卷五 | 樂府 | 三八首 | 八首 | 二・一% | 七首 | 八・〇% |
| 卷六 | 樂府 | 三八首 | 五首 | 一・三・二% | 二首 | 二・〇% |
| 卷七 | 歌吟 | 二八首 | 三首 | 一・七% | 二首 | 六・七% |
| 卷八 | 歌吟 | 五三首 | 四一首 | 七・四% | 三一首 | 五・六% |
| 卷九 | 贈 | 四一首 | 〇首 | 九・八% | 二首 | 五・〇% |
| 卷十 | 贈 | 二四首 | 〇首 | 九・四% | 〇首 | 〇% |
| 卷十一 | 贈 | 二五首 | 三首 | 〇・四% | 三首 | 〇・〇% |
| 卷十二 | 寄 | 二五首 | 二首 | 八・〇% | 二首 | 五・〇% |
| 卷十三 | 寄 | 二五首 | 二首 | 八・四% | 二首 | 六・七% |
| 卷十四 | 留別 | 三五首 | 〇首 | 八・六% | 〇首 | 〇% |
| 卷十五 | 送 | 二一首 | 〇首 | 〇・〇% | 〇首 | 〇% |
| 卷十六 | 送 | 三五首 | 五首 | 一・五・一% | 二首 | 四・〇・〇% |
| 卷十七 | 送 | 三五首 | 三首 | 八・六% | 二首 | 三・三・三% |
| 卷十八 | 酬答 | 三五首 | 三首 | 九・三% | 二首 | 六・六・七% |
| 卷十九 | 遊覽 | 五五首 | 一八首 | 三二・七% | 一四首 | 七・七・八% |
| 卷二十 | 登覽 | 三五首 | 七首 | 二一・四・三% | 四首 | 八・五・〇% |
| 卷二十一 | 懷行役 | 三四首 | 三首 | 八・八% | 二首 | 六・六・七% |

て固有名詞を含む絶句の割合はどのくらいあるのかを數えてみた。それを表1で示しておく。ここで用いた文獻は久保天隨譯註『李白全詩集1』(續國譯漢文大成)である。

また、李白の固有名詞の用い方は同じ固有名詞を繰り返して用いていることである。繰り返し用いている固有名詞(表4では詩語とする)を表4に掲げておく。

表4

| 順位 | 詩語 | 使用頻度 | 『李白歌詩索引』 | 備考 |
|----|----|------|----------|------------|
| ① | 秋浦 | 八回 | ④ | |
| ② | 長安 | 六回 | ② | |
| ③ | 長沙 | 四回 | ⑦ | |
| ③ | 洞庭 | 四回 | ③ | |
| ⑤ | 揚州 | 三回 | ④ | 揚都・広陵を含め五回 |
| ⑤ | 李白 | 三回 | ⑩ | 青蓮居士を含め四回 |
| ⑤ | 李陽 | 三回 | ⑧ | |
| ⑤ | 山公 | 三回 | ⑩ | 山濤(竹林の七賢) |
| ⑤ | 五陵 | 二回 | ⑭ | |
| ⑤ | 金陵 | 二回 | ① | |
| ⑤ | 新豐 | 二回 | ⑩ | 三〇回 |
| ⑤ | 会稽 | 二回 | ⑨ | 五回 |
| ⑤ | 峨眉 | 二回 | ⑤ | 九回 |
| ⑤ | 廬山 | 二回 | ⑤ | 一八回 |
| ⑤ | 廬山 | 二回 | ⑤ | 五回 |
| ⑤ | 楚江 | 二回 | ⑩ | 廬峰・廬崖を含め七回 |
| ⑤ | 錦江 | 二回 | ⑩ | |
| ⑤ | 洛陽 | 一回 | ⑥ | |

表4を参照すると一目瞭然であるが、李白は固有名詞を繰り返して用いていることがよく分かる。中でも、地名が圧倒的に多く使われており、全體の六割(表5参照)を占めている。

また、地名の中でも、特に目立って用いられているのが黄河流域に点在する長安と新豐、それに五陵の三つの地名を除いては全てが中國の南方の地名である。南方とは長江流域に点在する地名である。それは李白の生涯を考えた時、生活の據點の殆どを長江流域で過ごしたからに外ならないからであろうと推測している。なお、意外に感じたことは使用回数が長安の六回に對して、東都の洛陽が絶句では一回のみであること

ある。しかし、花房英樹編の『李白歌詩索引』(唐代研究のしおり 第八/同朋舎出版・昭和六〇年九月二〇日發行)によれば、一二回を數え、絶句を含めた詩の總數では六番目に當たる使用頻度である。

地名の中では長江の下流域にある「秋浦」(安徽省貴池)が使用頻度が圧倒的に多い。これは「秋浦歌」が連作であることも大きく影響しているのではなからうか。

表5

| 種類 | 地名 | 人名 | 山岳 | 湖沼 | 河川 |
|------------------|--------|--------|--------|-------|-------|
| 複数回数用いられた固有名詞の割合 | 五六・二五% | 一三・三三% | 一三・三三% | 六・二五% | 一二・五% |

地名に次いで、人名と山岳名が同數(十三・三三パーセント)を占めている。山岳は十三の山々が詩中で詠じられているが、複数回数詠まれているのは峨眉山(二回)と廬山(二回)の二つの山岳だけである。但し、廬山の場合は五老峰や香爐(峰)を含めると四回を數える(總詩數中では廬峰・廬崖を含めて七回を數える)が、青城山や九華山などの道教や佛教にゆかりの山が少ないのは何故なのであろうか。しかし、それよりもここで注目すべきことがある。それは人名に關する固有名詞の使い方である。その人名とは、李白自身の氏名である。李白は自分自身の本名を三回も詩中で詠じている。號である青蓮居士を含めると四回も自分自身の氏名に關する詩語を用いているのである。自分自身の氏名に關する詩語を詩中に多用しているのは李白以外の詩人達には殆ど例を見ないのでなか

ろうか。また、李白詩には二十七名の人名が詠じられているが、その中で、昭君・飛燕・西施、それに西王母や湘君といった七人の女性が詠じられている。女性に關する固有名詞の使用が二十五・九三パーセントと少ない。これは李白のイメージを以てすれば意外に少ないような気がする。李白には酒・月・女がつきものであると考えられているからである。後日、他の詩人達との比較検討を試みるつもりである。李白の絶句の中では自然石（邏人石・江祖石など）を詠う固有名詞が最も少ない。次いで、湖沼に關する固有名詞の使用例も少なく、纔か八例を数えるのみである。使用頻度の最も多いものから順から掲げてみると、①洞庭湖（四回）、②習家池・③曲江池・④鏡湖（各一回）となる。「洞庭（湖）」が最も多いのは、「陪族叔刑部侍郎曄及中書舍人至洞庭」詩という五首からなる連作があるからであろう。

おわりに

李白詩における固有名詞を含む絶句数は総絶句数に對して六七・〇五パーセント（總詩數に對しては十一・五二パーセント）も占めている。このことは詩人李白は詩中に固有名詞を取り込んで詠い込むの得意にしているからであろう。李白は絶句では二一六個の固有名詞を用いている。中でも、地名が最も多く、八十六個（三十九・八パーセント）を数え、次いで人名が三十七個（十七・一パーセント）、その後には河川名・建造物（石碑を含む）・山岳名・湖沼名・國名・自然石名と続く。なお、繰り返し用いられている固有名詞は表4を参照から分かるように、十六個（七・四パーセント）もある。最も多用されているのは地名であり、それは全體の約六割を占めている。ついで人名・山岳名・河川名、さらには湖沼名と續いている。個別では、秋浦の八回が最も頻度が高く、次いで長安の六回と

李白詩の絶句における固有名詞の用い方

なる。繰り返されて用いられている固有名詞の中で、特筆すべきものは使用頻度が三回と少ないが「李白」という自分自身の名前を詩中に用いていることであろう。號の青蓮居士を含めれば四回も数えることになる。己の名前を詩中に詠い込む詩人は李白以外には知らない。こうした己の氏名を用いて詠じているのも李白以外には考えられないような気がする。また、一首の中に、複數以上の固有名詞を詠い込む絶句は六十首もあり、固有名詞を含む絶句の五割以上（五三・〇九パーセント）を占めていることも注目すべき点であろう。中でも、一首の中に、五個の固有名詞が含まれる絶句が一首、四個の固有名詞を含む絶句が九首、三個の固有名詞が十五首、三個以上の固有名詞を含む絶句は二十五個もあり、固有名詞を複數以上含む絶句は絶句總數の四割弱（三七・〇五パーセント）を占めているのも李白詩の特長の一つではなからうか。

最後になるが、こうした固有名詞は頻度だけの問題ではなく、字面を巧みに用いている点にも注目せねばなるまい。全てを掲げて説明する譯にはいれないが、一、二例を取り挙げて考えてみたい。先ず「贈汪倫」詩の起句「李白乘舟將欲行」の「李白」は轉句「桃花潭水深千尺」の「桃花」を意識させている。李（スモモ）に對して、桃（モモ）をイメージさせる効果がある。また、「客中行」詩の起句「蘭陵美酒鬱金香」の「蘭」は菊科の多年草の「ふじばかま」であるから「鬱金香」という香り草を意識させるには十分な用字法である。李白は固有名詞の字面を巧みに用いて詩中に詠い込んでいることが分かる。

つまり、李白は好んで固有名詞を用いていた詩人であり、その上、固有名詞の字面を實に巧みに利用した詩人であると斷言しても過言ではなからう。

（盛岡大學文學部教授）